

## ＜心の囲い込み＞の三次元

實川 幹朗  
(姫路獨協大学)

心は、現代では個人の内側にあるのが常識で、これを＜心の囲い込み＞と呼ぶ。学問、科学もこれを大前提にしている。とくに、大脳の状態と心のそれとを一対一に対応させる考えが強固である。この思想はここ百年あまりのあいだ、歴史上おそらく最も完成された姿で健在だが、解決困難な課題を産み出し続ける。すでに十九世紀の後半に「脳神話」と呼ばれ、様ざま批判されていたにも拘わらず、である。これは歴史的、文化的に制約された一つの思潮である。「アニミズム」とか「汎心論（パンサイキズム）」などの用語で語られる世界観が、かつては洋の東西を問わず支配的であった。その世界では以心伝心、テレパシーといった仕組みが当たり前だが、近ごろの常識からは、どこかうさん臭い。 — このうさん臭い感じこそ、＜心の囲い込み＞の効果なのである。誰かがこれを証明して見せたわけではない。むしろ、世界の認識が心によるかぎり、世界の一部に過ぎない大脳がこれを独占するなら独我論は避けられず、矛盾が生ずる。

汎心論は、我われの＜うぶすな＞には親しみやすく、当たりの構えである。蛇や狐、神木、山や岩、水、土地の神、器物や船の神さえを祀る民俗信仰は、いまも生きている。「山川草木悉皆成仏」との表現が、仏典には見当たらないのに広く行き渡っている。日ごろの会話、行動や文学なら不都合はない。ところが学術的な著作に導入しようとするれば、たいへんな抵抗に遭う。汎心論のこの「鶴的」位置づけは、それ自身、興味深いことである。

本講演では＜心の囲い込み＞の仕組みに、三つの独立した次元を見出し、描写する。絶対的な個人主義ないし「個大脳主義」と汎心論という二つの対立極の間に、囲い込みの様ざまな相が織り成されている。これは一筋縄ではなく、三本の筋を取り出すと、造りが解析できそうである。すなわち、＜領域系＞＜人間系＞＜精神=物質系＞と呼ぶ。＜領域系＞とは、心をどこに囲い込み、その領域が他とどう係わるかの筋である。＜人間系＞は、人間に囲い込むのか、つまり心を人間に独占させるかどうか。＜精神=物質系＞では、精神および物質と心との係わりはどうかを扱う。これらの三本は、個別の支流ではない。各おのの糸が囲い造りの素材となって、三本の互いの絡み合いから、多彩な模様を浮き出させる仕掛けである。各おの動きが、少なくとも論理的には独立していることも、注意する必要がある。すなわち、このちょっと見には単純な世界は、少なくとも三通りのこだわりの思想によって形成されているのである。